

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう
1 事業名	オンリー碗(陶芸作品)を作ろう
2 実施期間	令和 7年 4月 1日 ～ 令和 8年 3月31日

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和7年5月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		陶芸の土に触れたときに、『陶芸土の独特な感触の違い』がより一層味わえるように、身近にある様々な土に触れる体験を多く持った。特に園の特徴でもある園庭の土や泥にはたくさん触れながらあそぶ。陶芸を初めて体験する保育者も、子どもと一緒に園庭の土と子どもたちと関わっていった。陶芸作品の完成をイメージするために、砂を器に入れたり、泥水を釉薬に見立ててとろとろの感触を体験したりしていった。	 
		(取組日) 令和7年6月1日 ～ 令和7年7月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		陶芸の土に触れたときに味わってほしい感触体験のために園庭の土や泥などに触れる機会を多く持ってきたが、そこから子どもたちのあそびが発展していき、園庭で砂を使ってシチューに見立てご飯屋さんに発展したり、昨年度に続いて泥団子大会にまで発展していった。	 
		(取組日) 令和7年8月1日 ～ 令和7年10月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		陶芸作品のイメージが持てるよう、既製品のお皿や湯飲みを使って食べたり、他のクラスですでに完成した手作りのお皿や湯飲みを触って見比べたりしてみる。作りたい作品を話し合っ決めて。それに使用する陶芸の土をグラムで分け、割れにくくするために丸く丸めて準備する。また、随時水をつけながら行い、土の乾燥を防ぐ。 土が乾燥して、割れてしまったという失敗体験も必要ではあるが、保育の狙いは『自分だけのお碗を作る』にあるため、制作過程での失敗は無いように段取りをした。	
		(取組日) 令和7年11月1日 ～ 令和7年12月26日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	
		陶芸土で作った作品。乾燥するのを待つ間も、お碗にまつわる遊びが展開された。自分で作ったお碗をイメージして、普段ままごとをしなかった子どもが器にままごとの食材を入れて調理ごっこを楽しむ姿があった。作品(お碗)が乾燥したため、次の行程である素焼きを行い、本焼きするために『釉薬』を付ける。子どもたちの遊びのタイミングを見て、釉薬付けは一人一人と行い、釉薬の意味を伝えつつ、仕上げていった。	

3	取組概要	(取組日) 令和8年1月5日 ~ 令和8年3月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること お椀が完成したら、自分自身で作った作品を用いて会食会を行った。自分の作品(お椀)は勿論割れないように使用していたが、食べ物も残さず食しており食育にもつながっていた。それは自分で作ったからだと感じる。そして、その後子どもたちは、自分ですべての行程に携わり自分だけのお椀を作った体験から、今後もっと自分の物、人の物、物を大切にする意味(その物には様々な人が関わっていること)を理解するきっかけになったと感じる。	
		(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
		(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
		(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
		(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
		(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの

効果検証報告書（継続事業用）

施設名		幼保連携型認定こども園葛飾みどり			
教育理念		自ら生きる ともに育ちあう			

計画時	事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)								
		健康	人間関係	○	環境	○	言葉	○	表現	◎
	1 事業名	オンリー腕(陶芸作品)を作ろう								
	2 事業概要	陶芸とは、土を形成して高温で焼き、陶磁器などを作る技術のこと。テーマに沿って、自分の考えや自分の個性を表現する。								
	3 対象学級(クラス名) 対象人数	花組・雪組・星組						95 名		
事業後	4 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況								
		年度初めに陶芸についての園内研修を行っている。陶芸を熟知している園長が、保育者に『陶芸とは?』という基礎から、作品の応用まで、実際に作る機会を設ける。 子どもたちには『陶芸を作る』というゴールは伝えずに、まずは保育者が率先して園庭の土や泥とかかわりを持っていく。陶芸の土を触って形にしていこうことへの抵抗感をなくすために、陶芸の土で形を整えていく際に意欲的に取り組めるように、感触遊びをしていく。								
	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等								
計画時	5 事業のねらい	◎陶芸作りには『きまり』は無い、というところから、想像力を働かせ、いちから自分の感性で土を形成して完成させる。◎冷たい土に触れることで、楽しい気持ちになったり、心が落ち着いていたりして、陶芸土の独特な感触を味わう。◎完成した作品はオンリーワンとなり、自分の作品に対して愛着を持ち、物を大切にする土台を築く。								
		事業実績から推測される効果や改善点等								
	5についての効果・検証	陶芸の土を触る体験から、子ども自身の遊びも広がった。これまで園庭の土や砂には興味が無いまま(触りたくない、汚れたくないなど)過ごしてきた園児も、今回のオンリーワンの体験から『汚れることが気になる』だった気持ちが『自分がやりたいことをやったら汚れるものである』という認識に変化していったように感じる。よって陶芸や陶芸土との関わりに関わらず、普段苦手だと感じている物や事についても『嫌なこと』と頭から決めつけずに『まずはやってみる』ということにつながっていった。また、お皿自体への興味が広がり、お皿やお碗など「誰かが作っているもの」という認識を持ち、給食の配膳時には気を付けて運ぶ様子が見られた。あそびの中では泥や土との関わりが増えていき、ままごと遊びが流行った。砂に触りたくない園児が触るようになったため、その園児の交友関係がままごとを通してかなり広がった。								

6 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 まずは職員が園内研修で陶芸体験をして、工程や土の気持ちよさを自ら体験する。 ・各学年で年3回陶芸体験をする為に日程を立て、計画する。 ・どのような陶芸作品にするのか？子どもの興味や関心から選ぶ。 ・自分の身体の一部で、お皿やお椀が出来る面白さ(膝椀・頭椀・こぶし椀など) ・園庭に落ちている葉の葉脈を模様につけてお皿を作ったりして、作品をより身近に感じられるようにする。 ◎準備 ・土を300グラム程度を空気抜きをして球体(割れを防ぐ)にしておく。 ・作る際に丸い皿状になるまでたたく。 ・作品が出来たら、よく乾燥させ、900度で素焼き。 ・釉薬でおのの思い描いた模様を付けたりして、本焼き。自分で思い描いたものを実際に作品にしていき、想像力を発揮する。 ・身近なもので作品を作ること、愛着をもって作品と関わる。 ・自分だけの作品を完成させ、物を大切にする気持ちが芽生える。
	上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点 感性と表現に関する領域『表現』。このオンリーワンは、園児それぞれが持つ『イメージ』を発揮する機会となっている。園児それぞれが会うものは同じであっても、それに対しての思いや感じ方は同じ人はいない。このオンリーワンから園児自身が『自分はこれでいいんだ』『これでこそ自分なんだ』と思って生きていくための一つの体験のきっかけとしていく。普段使っている茶碗の出来上がっていく工程に携わることで、既製品は誰かの手で作られているのだということを知り、物を大切にする気持ちの芽生えにつなげる。
	(継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点 オンリー椀はオンリーワンであるので、一生懸命考えながら作った自分自身の作品について愛着を持ったり、大切に使用したりする姿を見ることができるようになった。完成した作品に実際に果物をのせて食べたことで自分のお椀が生活の役に立っていることを実感できるようにした。また、作品にのせてみんなで食べることで、普段果物を食べなかった子ども口にしていく姿があった。そして友達の作品にも目が向き、自分が大切だと感じている自分だけのお椀があるのと同じように、友達にも自分で作った大切なお椀があるんだということを理解し、人の物も大切にしている姿があった。
事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 前年度は、陶芸の土から『泥団子』をイメージしたようで、泥団子を作る子供が増えた。じっくりと集中して泥団子を作る子どもたちの姿だったが、今年度はまた別の姿に発展していった。お椀を作る＝土を使ってこねる→叩くとペタペタと音が鳴る→水を加えるとゆるいところになる→お椀に入れて会食する、などの体験から、園庭の砂に水を加え、少し固まった土を使ってままごと遊びに発展していった。自分だけのお椀が完成すると、何かを入れてみたいという気持ちになり、自分で作ったお椀に愛着を感じていた。会食会の際、おやつをいれて食べたが、普段の会食会ではおやつに興味を持っていたが、自分で作ったお椀を用いておやつを食べる際には、すぐにおやつを食べず、まずはそれぞれのお皿に注目してどんなふうにしたかの会話で盛り上がっていた。お椀を作る過程で今回は子ども同士の「会話」が多くなったと感じる。前回同様に泥団子も流行したが、今回は「ままごとへの発展」が新たな発見だった。自分で体験したお椀づくりがままごとへ発展するのなら、もっといろんな種類の土を園庭に用意するなど、陶芸の土とつなげていけばよかったと振り返る。

計画時	7 環境構成例	◎完成作品を室内に飾り、園児自ら興味関心が持てるようにする。◎普段使っている給食のお皿に注目できるように、保育で取り上げていく。◎陶芸を形成しやすいように、板、水、雑巾の用意。◎土にも興味を持てるよう、陶芸の前に様々な種類の土を触って、感触を知る。◎陶芸を作る事だけが『作品』ではない。自分で作った作品を、自分の手で窯に入れ、焼き上がったら窯をあけ、出来たばかりの作品を見るため、安全を見ながら陶芸室に入る。
	事業後 7についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 焼き上がりで、ガラスが割れた作品があり、子どもには危険はなかったが、焼く際のふさわしい温度などが土や釉薬によって違うので、調べるべきだった。
計画時	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 ◎陶芸作りには『きまり』は無い、というところから、想像力を働かせ、いちから自分の感性で土を形成して完成させる。 →伸び伸びと物事に関わろうとする。今後、いろんな場面で自分なりに表現しようとする。 ◎冷たい土に触れることで、楽しい気持ちになったり、心が落ち着いたりして、陶芸土の独特な感触を味わう。 →土を通して、感性を豊かにし、楽しい、嬉しい、きもちいい、などの自分自身の思いに気が付いていく ◎完成した作品はオンリーワンとなり、自分の作品に対して愛着を持ち、物を大切に作る土台を築く。 →作られているものには、全てに『過程』があり、過程を思うからこそ、その物に対して『大事にしよう』『壊れないようにしよう』など、物を大切にするこゝろの本質を理解する
	事業後 8についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 想像力を働かせ、いちから自分の感性で土を形成して完成させていった。土を通して、感性を豊かにし、楽しい、嬉しい、きもちいい、などの自分自身の思いに気が付いていく中で、ままごとへの発展があり、土への興味からもっといろんな種類の土があったらもっと想像を膨らませてあそぶことができたのではないだろうか？ 『大事にしよう』『壊れないようにしよう』という気持ちで使っていった。
	9 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 予想していた子どもの姿と違った点(土への興味が大きく、ままごとへの発展があった。)から、保育者が無意識的にゴールを決めていたのではないかと感じる。子どもの展開をいち早く察知して、物を提供していきたい。今回は子どもの想像力を培うチャンスを逃したのではないかと振り返る。また、釉薬の適切な温度を調べずに、いつも通りの温度で焼いてしまったため、ひと作品が失敗で終わってしまった。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。